

し、劉氏は、その銘文は未見であり、またガンダーラ仏とも比較検討したいと述べた。



2013年度 第1回 ユニット3（東アジア地域班）国際ワークショップ 「仏教石刻と地域社会—中国中古時代における地域史的宗教環境の探究—」

■開催日時：2014年1月26日（日）10:00～18:00

■場所：龍谷大学大宮学舎清和館3階ホール

■報告者・報告題目：

報告1：北村一仁（龍谷大学非常勤講師，BARC 公募研究員）

「北朝国境地域における仏教造像事業と地域社会—山西省陽城県出土，上官氏造像を手掛かりとして—」

報告2：劉 建華（河北省文物出境鑑定中心研究員）

「鄴城地区出土仏教造像芸術特点及其他地区的影響」

報告3：石松日奈子（清泉女子大学非常勤講師）

「中国式如来立像の北朝的展開—雲崗第16窟大仏と地方造像—」

報告4：倉本尚徳（BARC 博士研究員）

「唐代造像銘に見る善導浄土教の影響—龍門石窟を中心に—」

報告5：劉 淑芬（台湾中央研究院歴史語言研究所研究員）

「九世紀的多種陀羅尼石刻」

報告6：佐藤智水（龍谷大学客員教授）

「山東の地域社会と女性主導の造像事業」

■コメンテーター：佐川英治（東京大学准教授），稲本泰生（京都大学准教授），会田大輔（日本学術振興会特別研究員PD，明治大学兼任講師），入澤 崇（龍谷大学教授），中田美絵（関西大学非常勤講師，東西学術研究所非常勤研究員），河上麻由子（奈良女子大学助教）

■参加者：87人

【報告のポイント】

本ワークショップは、ユニット3（東アジア地域班）がこれまで進めてきた中国仏教石刻研究の集大成として位置づけられる。中国・台湾より各1名の著名な研究者を招待し、合計6名の報告者により、国家、地域社会、ジェンダーなど様々な視点から、現地調査等によって得られた仏教石刻の新資料を多く用いた最新の研究成果が発表された。

【報告の概要】

北村一仁氏は、山西省陽城県に現存する北齊「上官氏等合邑造釈迦仏像摩崖」に基づき、北朝国境地域における仏教と民衆・政権の関係について考察した。北村氏は、「上官氏」摩

崖碑は、北斉・北周間の国境地域に位置する周壁において、当地に居住する上官氏一族が作成したものであると述べた。願文には、彼らの仏教信仰が表されているだけでなく、当時の政治・軍事状況ならびに北斉に対する忠誠が明示されているなど、政治的色彩が濃厚なものであると述べた。そのうえで当摩崖碑ならびに仏教信仰は、上官氏一族相互を繋ぎ、また彼らと政権とを結ぶ機縁になっただけでなく、その子孫が重修事業を行うなど、後世とのよすがともなったことを指摘した。

劉建華氏は、河北省鄴城地区より出土した、北朝以前に作成された仏像の特徴と、その他地域への影響について報告を行った。劉氏によれば、仏像は 2 世紀初頭に中国に伝わったが、当初は道教信仰・鬼神崇拜と混交しており、4 世紀前半に至って仏像として分かれるに至ったという。その最初期の事例は鄴城地区に見られるが、鄴城は河北省の最南部に位置しており、曹魏以来六王朝が都を置いた地であった。数年来、当地からは多くの北朝時代の仏像が出土したが、劉氏は事例を挙げつつ、各時代の特徴を紹介した。その中でも最も多いのが北斉時代に制作されたものであり、精巧な透かし彫りを施したものであったが、その芸術的生命は北斉の滅亡と共に失われたと述べた。

石松日奈子氏は、北魏各地で制作された大仏を中心に事例や史料を紹介し、大型如来像が“地方から中央へ向けた皇帝崇拜造像”のシンボルとして支持された可能性を検討した。石松氏は、地方大仏を生みだすエネルギーとして、現実社会における“中央の皇帝に対する地方仏教徒の辺疆意識”があったと述べた。しかし実際の立像形式の流行には偏りがあり、その原因として、皇帝崇拜造像の浸透度や、皇帝観の変化などがあるのではないかと述べた。また河北と山東の事例では、尊名を弥勒と伝える作例が多いことから、皇帝崇拜と弥勒信仰の関係という視点から考察する必要があると述べた。

倉本尚徳氏は、唐代龍門石窟における善導浄土教の影響を考察した。これまでの研究では、龍門石窟においては、善導の信仰と直接関係する阿弥陀像や浄土の造形に善導浄土教の信奉者が直接関与したことを示す事例は発見されていなかった。今回、倉本氏は善導の著作の用語と実地調査に基づき記録した造像記の比較検討を行い、趙客師洞南壁の顕慶 5 年（660）造像記、675-689 年と推測される慧審造像記（1074 龕）、上元 2 年（675）の紀年銘を有する周遠志等造像記（1497 龕）が、善導浄土教信奉者によるものであると新たに指摘した。特に趙客師洞では正壁本尊や北壁の比較的大きな像も同じ顕慶 5 年の紀年銘を有する阿弥陀像である。またこの窟と関わりのある「敬善寺」に関係のある造像記にも阿弥陀像銘が多く見られる。このことから、650～660 年代にピークを迎える龍門石窟の阿弥陀造像に善導浄土教信奉者が少なからず関わっていたことが推測され、善導が勅命により龍門盧舍那大仏造営の検校僧に抜擢されたことも以上の背景を想定する必要があると論じた。

劉淑芬氏は、9 世紀の中国社会における陀羅尼信仰の流行の様相に関して、同時に複数の陀羅尼をひとつの石に刻む「多種陀羅尼石刻」について検討した。具体的には、唐大和 2 年（828）の紀年を有する靈璨造窣堵波塔刻経と咸通 11 年（870）天寧寺趙匡符経幢を主に分析した。前者は墓塔に 12 の経呪が刻まれ、個人が平生唱える真言呪語を主として構成さ

れる。後者には『仏頂尊勝陀羅尼經』のほか、13種の真言・陀羅尼が刻まれ、造主が念誦した回数まで刻まれている。上記石刻に見える『金剛經』の真言は、真言を付した『金剛經』のテキストが9世紀前半にはすでに出現し僧俗ともに修習していたことを示す。また、陀羅尼は、主に石刻拓本と刊本という二種類の手段を通じて流布したが、9世紀以後、手印とのかかわりは減少し、陀羅尼持誦に偏重して発展し、顯密兼習の傾向にあったと述べた。

佐藤智水氏は北朝時代の造像銘に女性供養者が頻繁に登場する経緯を現地調査により得た山東省臨淄鎮出土正光3年(521)張勝男等造像碑などの資料に即して整理し考察した。その結果、北魏以降、奉仏供養のための造像事業という社会的行為において、女性が主体的に参加する傾向が徐々に進展していく様相を明らかにした。こうした女性主導の集団造像は華北全域に散在しており、地域的な特性がその要因とは言えない。仏教信仰が女性の精神的支えになったのと同時に、寺院参詣や尼僧を介した情報交換など交際の場の広がりがある背景として考えられると指摘した。また、張勝男造像碑の供養者の分析から、この造像事業は、清河張氏と清河傅氏という名族の疏族を軸に臨淄地方で形成された在地有力者による姻戚関係を利用して、或いは彼らの結束を誇示する意図を含んで行われたものであると指摘した。そして、張勝男のような活動的な女性にとって、名族としての誇りがその支えになっていると述べた。

【議論の概要】

初めに、会田大輔氏は、北村氏の報告に対し、一点目として、造像記の中に現れる造像活動そのものが、皇帝に対する忠誠心と直結し得るのかという指摘を行い、また二点目として、西魏北周と北斉で、河東の支配体制や仏教利用のありかたに違いが存在するのではないかと質問した。それに対し、北村氏は一点目の指摘について、当時の状況を鑑みるに、造像の中心的人物である上官願などは忠誠心を有していたと考えられるが、それも含めて生存戦略であったということは十分に考えられると述べた。二点目の質問について、河東地域における事例となる東魏北斉の造像が少ないため、さらに分析・考察の範囲を広げていく必要があると答えた。

続いて、稲本泰生氏は、まず劉氏の報告に対し、一点目として造像の通史的な発展の中で、特に後趙と、東魏北斉の鄴城における造像とを如何に位置づけるべきか、そしてどの程度の範囲まで波及したのかという質問を行った。次に二点目として、様式技法の中心地・石材の産地・造像の拠点の中心地として鄴城は位置づけられるのか、その場合曲陽や定州などとの関係はどうなのか、という点について質問した。それに対し劉氏は鄴城における後趙造像の作風の影響は5世紀中葉まで及び、地理的には、河北を中心に、北京・天津・遼寧・黒龍江・陝西・甘肅など、華北各地に及んでいると述べた。二点目について、白石の産地は北朝時代においては曲陽に限られ、透かし彫りの技術は曲陽を中心にして発展したが、東魏以降、鄴はそれを継承し、北斉時代に鄴を中心に双層透かし彫りによって代表される高い技術水準に達したと答えた。

次に稲本氏は、石松氏の報告に対し、皇帝という権力者の表象と仏のような超越的な存在の関係をいかに位置づけるべきか、また、雲岡第 16 洞の大仏には中国化した皇帝イメージが重ねられたと石松氏は述べたが、この像の服制は中国式だが、波状髪を採用している点は「中国化」とは言えない。これを如何に理解すべきか、と質問した。それに対し石松氏は、現実の皇帝に対する崇拜の本気度は皇帝自身の資質や崇拜者の階層によって異なると答えた。波状髪の採用については、中国式服制で波状髪という新しい仏像様式は雲岡で創案されたのではなく、雲岡以外の、おそらくは平城に存在した寺院で造られていた可能性（南朝影響も含めて）があり、それが雲岡第 16 窟で皇帝大仏として採用された、と述べた。

中田美絵氏は倉本氏の報告に対し、唐代龍門石窟において浄土信仰がさかんになるが、当時の人々が龍門石窟をいかなる場と認識していたか、また唐代龍門石窟は西方浄土一辺倒ではなく諸仏の浄土であるとする久野美樹氏の研究との関係、という 2 点について質問した。それに対し倉本氏は、唐代には高僧が龍門石窟に葬られるようになるなど、龍門石窟の聖地化の傾向が見られるとした上で、浄土信仰の隆盛自体は必ずしも龍門石窟に限られた現象ではないと答えた。また、久野氏の見解にはおおむね賛成であるが、今回の研究成果をふまえて善導浄土教の影響が再評価されるべきであると答えた。

また、中田氏は劉氏の報告に対し、多種陀羅尼が 9 世紀に広まった理由と、複数の陀羅尼を刻む時の全体としての機能という点について質問した。前者について、劉氏は、不空ら密教僧の登場と結縁灌頂の流行、そして中央権力の弱体化と藩鎮勢力の増大による社会の不安定化をその理由として掲げた。後者については、「滅罪」と破地獄・生天など「度亡」が主な機能であるが、すぐさま利益が得られるという即効性もあると答えた。

河上麻由子氏は、佐藤氏の報告に対し、仏教を取り入れることで女性の意識がいかに変化したかという問いを北魏だけではなく東アジア全体から考えることが必要だと論じ、百済弥勒寺出土の舍利奉安記に三宝に棟梁たる存在として王后が見えること、行基の知識集団に女性が多いことなどを例示した。そして、女性中心の造像特有の要素はあるかどうかについて質問した。それに対し佐藤氏は、願文に女性特有の要素は特になく、男性並みのことができるということで満足していると答えた。

また、佐川英治氏は、女性の集団造像は主体的に行われたのではなく、男性による集団造像をポジとすると、そのネガにあたる可能性もあるのではないかと疑問を呈した。それに対し佐藤氏は、例えば偶蒙文姫造像記からは、少数民族の女性が集まって役割分担を決めて世代を超えて活動していることがわかり、これは女性が主体的に造像を行った確かな事例のひとつと見なせるものであると答えた。



〰〰〰〰〰〰〰〰

2013年度 オムニバス講義（ユニット3担当）「変容する仏教Ⅰ」

- 報告題目：造形作品からみる滋賀・長命寺穀屋とその周辺
- 開催日時：2013年6月21日（金）9:00～10:30
- 場所：龍谷大学深草学舎 22号館 103教室
- 報告者：松岡久美子（龍谷大学龍谷ミュージアム講師）
- コメンテーター：根井 浄（龍谷大学非常勤講師）
- 参加者：66人

【報告のポイント】

長命寺は西国三十三所の三十一番目の札所であり、琵琶湖の東岸に位置している。長命寺の門前に存在する穀屋寺は、長命寺と関わりの深い尼寺である。松岡久美子氏は、長命寺穀屋で発見された「長命寺参詣曼荼羅」「観心十界曼荼羅」の調査によって得られた成果を通して、寺院が時代の変化にどのように対応し、存続していったのかという点に関して考察を加えた。

【報告の概要】

報告の導入として、松岡氏は穀屋寺と、穀屋寺所蔵「観心十界曼荼羅」「長命寺参詣曼荼羅」の概要について説明を行った。元々、穀屋は勧進等で集めてきた物を集積・管理していた場所であって、長命寺穀屋の場合も、勧進集団が拠点とした施設であったと考えられる。長命寺穀屋は開基を慈芳、中興の祖を慈白としているが、江戸時代には慈芳を重視する西穀屋と、慈白を重視する新興の東穀屋に分裂していたとされる。現在の穀屋寺本堂には西に慈芳像、東に慈白像が安置されているが、これは東西穀屋を意識した配置であろう